



澤洋介、三戸素子、P. ヤング友の会ニュース

2002年2月8日発行 No.33

梅も咲き、花粉もとんでおりますが、会員の皆様はお元気でいらっしゃいますか。友の会ニュース第33号をお届けします。まず去る1月末に行われたクライネス・コンツェルトハウスOp.12について、たまには演奏家サイドの感想をきいてみよう、と、洋介さんと素子さんに書いて頂きました。

コンサートに求めるもの

1月27日クライネス・コンツェルトハウス「十字架上の七つの言葉」を終えて

小澤洋介、三戸素子

毎回コンサートのプログラムを組み立てるとき、そのコンセプトがどこまで客観的に、2時間のコンサートで伝わるだろうか、ということにとっても考慮します。一つのコンサートには膨大な数の作品の中から数曲を選び出して、うまく配置しなければなりません。絵画や料理や服装のように、組み合わせによってお互いが引き立ったり、だめになったりします。新鮮さやコントラスト、様式やバランス等さまざまな観点があります。また、一つのテーマに絞ってもっと推し進めると、相互関連作用で普段なかなか到達できない奥の深いところが見えてきたりします。

今回のハイドンの「十字架上の七つの言葉」は、一曲だけで70分、コンサート丸々一つ分の規模なので、他の曲と組み合わせる必要はありませんでした。しかしこの曲の、前奏曲に続いてゆっくりな曲ばかり七つで1時間あまり、そして劇的な後奏2分という配分は、変化を持たせるという意味では過酷です。作曲者ハイドン自身もそれについて悩み、工夫しています。それでもその名人芸の工夫を演奏で表現するのは難しく、なかなか納得いく演奏には出会えません。実際、ある友人が「あの曲はあの長いのをずっと我慢して座っていて、最後の激しい後奏のところをやっと少し聴いた気になるんだ。」と話すのを聞き、そうだろうなあと思っていました。でもこの曲は本当はすごい曲で、まさに一つのテーマを深みにまで追及するという最たるものなので、ぜひ演奏したく思っていました。ハイドンという作曲家の、ともすれば軽視されてきたとも言える真の偉大さ、西洋文化の根底ともいえるキリスト教など、もう一度じっくり見据えるに足る素材です。

まずこの曲は本当は、ただ単にコントラストをつけるのではない、一曲一曲ゆっくり濃密な緊張感を積み上げていってキリストの昇天でつき抜ける、そして最後の後奏はあつという間のその激しさが緊張感をかき崩し現実が戻ってくる、という狙いでハイドンは構成した、と解釈しました。そして、それを何とか実現させたいと思いました。

キリスト受難がテーマなので、そのテーマを最後まで追えないと途中で頓挫してしまいます。それで聖書朗読を蜷川有紀さんをお願いし、一曲一曲のストーリーを明

確に言葉でも伝えられるように配慮しました。曲間で声と言葉がうまく調和するように、まるで最初からそのテキストで構成され、作曲されたようになるまでリハーサルしました。演奏は、たった四つの弦楽器でこれだけのテーマを表現するので、誰の一音も無駄にせず、どの音も大切な意味が十分引出されるように細密に練習しました。

配付するプログラムを入念に準備し、どこまでできるか期待と不安で当日を迎え、今度は会場の空気と調和するようにと会場練習をしてみると、蜷川さんの声も演奏と同じように電気を通さないマイクなしの方が良いということがわかりました。そしていよいよコンサートでした。

聴いていらした方は、きっと様々な感想を持たれたと思います。皆、いろいろな思いやコンディションで集まって来られたのですから。このクライネス・コンツェルトハウスのコンサートでは、いつも皆さまから任意のご感想をいただいているのですが、様々な好意的なお声の中で、特に中学1年生の少女のものに、私たち演奏者はとても幸せな気持ちになりました。

『第7曲が私はいちばん好きな曲でした。語りを聞いたとたんには私ば「ああ、キリストは自由になれたんだ」と思いました。演奏の中で特に感動したのが、まるでお父さんの背中のような強くてあたたかい響きを持ったビオラとチェロ、お母さんにだきしめられてうれしかったようなやさしい音のヴァイオリンです。今日、ここに来てよかったな、と思います。(全文のまま)』

また「今度がいちばんよかった。」とだけ思っていたら演奏会を目指してやっていきたいと思っています。

新規会員を随時募集しております。知人、ご友人の方々に友の会をぜひご紹介下さい。

年会費 一口 1,000 円

郵便振替口座 00260-1-13926

加入者名

「友の会 小澤洋介・三戸素子・フィリップ・ヤング」

新規入会ご希望の方はその旨お書添えの上直接年会費をお振込下さい。

三戸素子のハンガリー 缶ヅメ6日間

三戸素子 記

2月末にハンガリーに行って、今度のリサイタルのプログラム、モーツァルト・シューベルト・バルトークをクリスティーナ・ヴェーナーのところで練習してきました。

クリスティーナは、ブダペストのバラの丘という高級住宅地の高台にある、古い館の2階にあるフラットに住んでいて、その真下の1階にお母さんが住んでいます。私が行くと、信じられないことにお母さんはバラトン湖のほとりの別荘や親戚と保養地に出かけてゆき、何と私がお母さんのフラットに滞在できるのです。

クリスティーナは一人暮らしで遅寝遅起き、とてもマイペースなので、私は彼女とは昼食とリハーサルの時だけ一緒に、後は別々のペースで生活します。食事に気を散らさないよう、お母さんの冷凍庫の中にストックされたスープや煮込みを温めてありがたく頂き、外出も料理もしませんでした。

今度のプログラムは特に難しい曲ばかりなので、私は朝起きて柔軟体操をしてから、ヴァイオリンにしがみつかり必死に個人練習をし、午後からの二人でのリハーサルを目標に、毎日成果が上がっているよう励みました。旅先で雑用もなく、完全隔離状態だからこそその練習でした。今回はクリスティーナも調子がよさそうで、意見も一致することも多く、まさに自分の演奏を磨くことにだけ集中できました。

行って6日目に、ブダペストでコンサートをしました。このプログラムを演奏会に出すのは初めてなので、そういうときの常で、曲と曲のペース配分とか、本番のテンションで難所にさしかかったときの感覚とか全てが新しく、ちょっとあの口デオをやっているような気分です。またこのプログラム構成は、3曲とも個性はまったく違って、規模や複雑さの度合いが甲乙つけがたく、3つの大きな山をたどって、天才作曲家たちの果てしない挑戦や大きさに迫りたいというもので、一曲一曲それぞれがへとへとになります。

終わった後、びっくりするほど多くのサインを求められ、また本場のバルトーク通からのお褒めの言葉を頂いて、ますますやる気になったのでした。

コンサート無料ご招待のお知らせ！

来る3月24日(日)19時より、東京ドイツ文化センターにて行われる、日本リヒャルト・シュトラウス協会の例会としてクライネス・コンツェルトハウスが招待演奏会をします。曲目はR.シュトラウスの弦楽四重奏曲、ピアノ四重奏曲、小品です。いずれも滅多に演奏されない曲ばかりで、それもR.シュトラウス協会の主催です。行ってみたい方は、無料招待券がたくさんありますので何枚でもお気軽に、洋介さん素子さんのところにご連絡ください。お申し込みの方には、当日会場受付に準備しておくそうです。



申込先：小澤、三戸

FAX.042-945-6329 TEL.042-945-6326

電子メール mai@ozawa-y.com

東京ドイツ文化センターの所在地

東京都港区赤坂7-5-56

地下鉄青山一丁目駅から徒歩5分

今後の主なコンサートとスケジュール

3月24日(日) 日本R.シュトラウス協会例会演奏会

R.シュトラウス：弦楽四重奏曲第1番 Op.1

R.シュトラウス：ピアノ四重奏曲 Op.13

出演：ヴァイオリン：三戸素子、山田耕司 | ヴィオラ：二宮隆行 | チェロ：小澤洋介
ピアノ：ラファエル・ゲラ

東京ドイツ文化センター 7pm 開演

4月6日(土) 桜の鎌倉、円覚寺骨髄バンクチャリティ

サンクト・フローリアン三重奏団

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲 第1番 変ホ長調

ハイドン：ピアノ三重奏曲 ト長調「ジプシー」

チャイコフスキー：ピアノ三重奏曲

「偉大なる芸術家の思い出に

出演：ヴァイオリン：三戸素子 | チェロ：小澤洋介 | ピアノ：フィリップ・ヤング

問：神奈川骨髄バンクを考える会 Tel.0462-21-0010

円覚寺方丈 5pm 開演 ¥3,000 当日券 ¥3,500

4月14日(日) 三戸素子ヴァイオリンリサイタル

ヴァイオリン：三戸素子、ピアノ：クリスティーナ・ヴェーナー

モーツァルト：ヴァイオリンソナタ A-Dur KV526

シューベルト：幻想曲 八長調

バルトーク：ヴァイオリンソナタ 第1番

東京文化会館 小ホール 2pm 開演 ¥5,000

友の会割引有

5月12日(日) モーツァルト後期弦楽四重奏曲連続演奏会

第1回 ハイドンセット I III 2pm 開演 オペラシティリサイタルホール

第2回 ハイドンセット IV VI 6pm 開演 オペラシティリサイタルホール

5月20日(月) モーツァルト後期弦楽四重奏曲連続演奏会

第3回 プロイセン王 I III 7pm 開演 東京文化会館小ホール

一回券：¥5,000 二回券：¥9,000 三回券：¥12,000

会場が違いますのでご注意ください。

友の会割引有